
今朝は体調が優れなかつたものだから

M川

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今朝は体調が優れなかつたものだから

【コード】

N1383F

【作者名】

M川

【あらすじ】

体調不良で会社を休んだ僕は、風邪薬を買いに街に出かける。

今朝は体調が優れなかつたものだから、大事をとつて仕事を休ませてもらつこにした。会社の扱いとしては、有給ということになる。有給なんて、こんなことでもなければなかなか使えないので、考えようによつては良い機会だつたのかも知れない。今日はゆつくり休むとしよう。

しかし頭が痛くてどうにもゆつくり眠れない。鼻の奥もぐずぐずとむず痒い。クシャミが出そうで出ないような、そんな中途半端な不快感がずっと続いている。風邪だらうか。ここ最近の暑さゆえ、ダラシノナイ眠り方をしていたのだが、それ祟つたのだらうか。病院に行こうか。しかし、保険証はどこに仕舞つただらうか。思い出せない。探すのも億劫だ。

置き薬は、たしか、切らしていたか。

しかたがない。近所の薬局で風邪薬を買って済ませようか。

申し訳程度に腹にかけていた毛布をのけると、ひやりとした空気が寝巻越しに肌を撫でた。思わず身震いする。もう夏も終わりか。フラフラと屍食鬼のような足取りで洗面所へ向かう。頭の中がズッシリと重い。宿酔いのごとき鈍痛である。

ジャブジャブと顔を洗う。上げた顔を鏡に映してみる。ビショビショに濡れた、無様な男が、そこに、いた。これが私か。まったく、忌々しい。

寝巻を脱ぎ捨て、外出着に着替える。生乾きのシャツが肌にまとわりついて気分が悪くなる。

外に出ると曇天。いまにもすすり泣きだしそうな空であった。

傘は持つていつた方が良いだろうか、としばし逡巡するが、なにすぐに戻つてくるのだから、と、手ぶらで行くことにした。傘というやつはどうにも好きになれない。水滴を防ぐことしか能がないくせに、奴を携帯することで片手は独占されてしまう。道具として明

らかに図々しいのだ。

薬局は商店街にある。商店街までは、私の家から3分ほどで到着する。買い物には大して時間を取りないだろ。往復を考えて、10分もあれば、帰つてこれるはずだ。それまで雨よ、どうか降らないでくれ。

果たして薬局にたどり着くまで空は泣きださなかつた。

湿つた空氣の匂いが妙に懐かしく感じた。

休日でもないのに、こんな朝から商店街を歩くなどと、希えてみればなかなか無かつた機会である。

シミの浮いた電灯が幽かに明滅する店内に足を運ぶ。鼻につく薬の匂いが、私は嫌いではない。

風邪薬の棚を探す。漢方薬が良いとは聞いたことがある。副作用の心配が無いらしいのだ。

陳列してある小箱をあれこれと手に取つてみる。熱はあまりないようだから、解熱作用はともかく、頭痛と鼻炎に効くやつがいい。いくつかの候補から絞り込み、田的の品を定めた。よし、これにしよう。

会計に持つていこうとして、ふと思う。

そういえば、かゆみ止めの軟膏を切らしていた。

私はどうも肌が弱いらしく、ことあることにかぶれてしまつ。もうじき蚊の季節は終わるが、ダニの被害には年中あつてゐる。折角の休日、布団を干したいのだが、あいにくの曇天である。

かゆみ止めのチューブ入り軟膏を見つける。これはいつも買つているものなので、逡巡する余地はない。

さて、買物は終わりでも良いのだが、どうするか。どうせだから、不足しているものをまとめて買っておくのも良いかもしだれない。何か必要なものはないだろか、と考えてみる。

そうだ、といえば最近、眼が疲れることが多い。田薬を買っておこう。

絆創膏も残り少なくなつていたはずだ。必要な時に切らしていく、

アタフタした経験が何度かある。買い足しておるべきか。

先日道路の段差で躓いて転んで以来、どうも左の腿の付け根、骨と骨の繋ぎ目に違和感がある。湿布薬も買っておいた方が良いかもしない。

半年前から下の歯茎のあたりが盛り上がり始めて、つい先月、鋭い牙が生えてきた。そこから毒液が滴るものだから口の中が荒れてしまう。何か良い歯磨き粉はないだろうか。

いつからだか覚えていないが、胸の真ん中、ミゾオチのあたりにできものがあり、それが老婆の顔面の形をしている。最近では仕事中にも関わらずそいつが話しかけてきて、どうにも集中できない。皮膚病の薬というか、こいつを黙らせる薬はないだろうか。

背中の黒い羽根もカサカサと乾いて、ツヤがなくなってきた。それとは対照的に、尻尾の方は油の分泌が過多になっているらしく、常にギトギトベタベタとしている。石鹼を使い分けた方がいいのかもしれない。これも買っておこうか。

最近どうにもイライラしてしまい、ついつい気に入らない相手を喰い殺してしまう傾向がある。特に牙が生えてきてから顕著である。ストレスを抑えるため、カルシウムの錠剤などあれば、買っておいた方がいいかもしれない。余談であるが、この前も取引先の受付の女性の態度が気に入らなかつたので、回りに人がいない時を狙つてバリバリと頭から食べてしまった。死体というか食べ津はトイレの通気口にかくしておいたのだが、結局どうなつたのだろうか。私は新聞を見ないので、分からぬ。

左の腕が群青色の鱗に覆われているのも気になるところだ。指は筋張つて、爪はとがり、まるで悪魔の手である。ひと振りで人間の首を飛ばせるため、これはほとんど凶器というか、兵器である。おかしなこともあつたものだ。いつからこうなのだろう、と考えてみると、これは生まれつきだつたような気もする。薬で治せるものでもないかも知れない。そもそも病氣ではないような気がする。かふつ。

空咳一つ。

喉の奥からこみあげてくる異物感。眼球、心臓、腸、筋肉。子宮に精巣、軟骨、脂肪の塊。おびただしい量の人間の破片。無数の命の残滓。あいつや、あいつや、あの人や、あの子。彼や彼女や彼女らの欠片。私は、それらを唾と一緒に飲み込み、息をつく。鉄錆の匂い。甘酸っぱい腐敗臭。粘膜を刺す塩味。喉が痛い。喉が痛い。喉が。痛い。だから。

うん、そうだ、喉飴も買っておこうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1383f/>

今朝は体調が優れなかったものだから

2010年10月8日15時20分発行